

JSP NEWSLETTER

日本生理心理学会ニュースレター

Volume 1, Issue 1

2020年 春号

日本生理心理学会ニュースレターがはじまります。

会員相互の情報交換や学会からのお知らせを会員へ届けることを目的としてニュースレターを発行します。紙媒体ではなくて電子媒体でお届けいたします。できるだけ手軽な情報交換の場としたいと希望しています。これは入戸野宏 機関誌編集委員長が発案し、高原 円 編集委員をニュースレター編集委員長として阿部 恒之 広報担当理事が推進することになりました。手探りの状態ではじめますが、会員からの積極的な発信も期待しています。風通しのよい活力ある生理心理学会にしたいと存じますので、皆さんの積極的なご協力をよろしくお願いいたします。

日本生理心理学会理事長
坂田 省吾



編集委員会より

今年の4月28日付で、機関誌『生理心理学と精神生理学』の2019年37巻1号から3号までが、J-STAGE上で発行されました。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjppp/-char/ja>

機関誌の発行はこれまで最大2年間遅れており、学会の皆さまにご迷惑とご心配をおかけしたことをお詫びいたします。これで正常のスケジュールに戻りました。今後は、電子出版のフットワークの軽さを生かして、丁寧かつ迅速な査読とタイムリーな出版を心がけていきます。受稿から2ヶ月以内に最初の査読コメントが著者に届くように、編集体制を見直しました。原著・短報・テクニカルノート・評論などの投稿を随時受けつけております。投稿規程をご参照の上、ぜひご投稿ください。

<http://www.seirishinri.com/journal/instruction.html>

今後とも「生理心理学と精神生理学」をよろしくお願いいたします。

機関誌編集委員長
入戸野 宏

◆ 近著ご紹介

「研究テーマ別 注意の生涯発達心理学」 坂田陽子・日比優子・河西哲子（編）

ナカニシヤ出版 2020年3月20日発行 212ページ 3000円＋税

注意研究を発達心理学と認知心理学の融合点から整理しなおしました。二部構成となっており、第一部の基礎編では、各章で扱われる注意の様々な側面に対して、それぞれ、乳幼児、成人、高齢者の研究を紹介するという、年齢を縦割りに解説するオリジナルなスタイルを採用しました。注意の各側面を測定するための実験操作から丁寧に説明し、注意実験をはじめようとする方たちにも役立つよう心掛けました。第二部の応用編では、注意に関するトレーニング効果や認知症など、身近で、社会的関心の高いトピックを選びました。全体を通して生理心理学・精神生理学に関連の深いテーマであり、脳波・事象関連電位による知見も含まれています。

（河西 哲子）



「「かわいい」のちから：実験で探るその心理」 入野野 宏（著）

化学同人 2019年6月1日発行 251ページ 1900円＋税

「かわいい」という言葉を聞くと、何となく楽しい感じがします。でも、「かわいい」とはいったい何であり、なぜ人々を魅了するのでしょうか。かわいいことは何かの役に立つのでしょうか。本書では、このようなさまざまな謎に、実験心理学の立場から迫ってみました。

2007年にこのテーマに取り組みはじめたとき、実証的な研究ができるのか半信半疑でした。そこで、まずはかわいい写真を見たときの心理生理反応を測定することにしました。心理生理学には、よく分からない現象であっても、とりあえず多面的に測定できるという強みがあります。そのときのコツは、「似たようなテーマを扱った先行研究の手続きを正確に踏襲する」ということです。あいまいな現象をぞんざいに測ると、解釈に苦しむ結果が得られます。あいまいな現象であっても、すでに確立された厳密な方法論で測定すれば、これまで蓄積された知識のなかに位置づけることができます。

生理心理学会では、2014年の第32回大会（筑波大学）で「かわいいの心理生理学」という小講演をさせていただきました。表情筋反応の研究が中心でしたが、最近ようやく大学院生がかわいい顔に対する事象関連電位の測定を始めたところです。

本書では、かわいいと感じることの性差や年齢差に始まり、「かわいい」と「cute」の違い、幼さとかわいさの関係、「かわいい」を感情として捉える視点、「かわいい」がもたらす効果、「かわいい」の産業応用に至るまで、幅広いテーマを扱いました。「かわいい」に関する国内外の研究文献リストもつけました。著者のウェブサイト（<http://cplnet.jp/kawaii>）にもリンクを載せています。

本書のタイトルに表現したように、「かわいい」にはこれからの時代に必要な力が宿ると信じています。「かわいい」の研究が今後さらに発展していくことを期待しています。

（入野野 宏）



電子書籍
あります



「自然界の1/fゆらぎ応用解析法 真の自律神経機能とは ～音楽McT療法の脳機能改善法を巡って～」

後藤幸生（著） 真興交易医書出版部 2020年1月30日発行 96ページ 2200円＋税

私達が生きるこの自然界の異常気象や新型コロナウイルスなどの問題が取り沙汰されるなか、健康や生命に深く関わる自律神経機能についての新しい考え方をまとめて解説したのが本書である。それは従来からの交感・副交感神経機能というのは大脳皮質からの錐体路系のものであって、人間の正常状態時に極めて重要なバランス調整役を果たしている錐体外路系のことになおざりになっていたことで、真の自律神経機能とは、大脳皮質以外の小脳や諸種の核などを通じての後者も含めた脳中枢全体からの情報であるべきだと考え、その裏に隠れた現象、つまり正常で穏やかな自然界の中で、悩めるヒトの気持ちを癒し、

心地よい気分にするしてくれる‘1/fゆらぎ音波’に注目、その意義を改めて考え直した内容であるということになる。即ちこの音響学的理論を応用した解析法によって錐体外路系情報をも含めたものこそが真の自律神経機能であって、その指標として「バランス指数Balance index」を作成、その医学的検証を行う際には1/f ゆらぎ音波が自然界の音楽なので、代りに人工音波‘音楽’を用いて各種の病態下での脳に及ぼす影響や効果の違いを検証してきた。なかでも寝たきりに近い重症患者で物言わぬヒトの‘こころ’と‘からだ’の内面までこの新たな指標で読み取るため、人間本来の二足歩行に向けてのリハビリ脳活療法Music-care Trampoline（音楽McT）療法を巡っても科学的に分析、老若年代による違いとか季節による健康への影響の違いなどに関してもエビデンスが得られたという内容でもある。それ故に、これが各種の障害で悩む方々に‘希望’を与えることでできれば誠に‘幸い’で、その意味で本書が出版された令和二年’が、これらの方々にとっては‘幸希元年’になってほしいと願っている。（後藤 幸生）



◆ イベント参加報告

モスクワ大における欧州心理学会とパブロフ研究所訪問

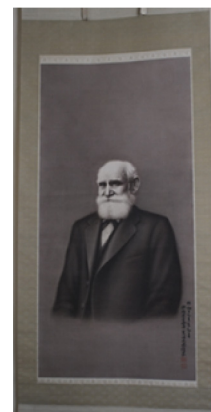
東北大学大学院文学研究科心理学研究室 阿部 恒之

2019年7月、ECP2019（16th European Congress of Psychology：第16回欧州心理学会大会）がモスクワ大学を主催校として開催されました。2013年の第13回大会（ストックホルム）以来2回目の参加です（隔年開催）。割と「ゆるい」雰囲気のできる学会ですので、初めての海外発表にお勧めです。但し今回は、基調講演者（演題“The Psychology of Cosmetic Behavior”）としてお招きいただいたので、講演会場は一番大きな会場でしたし、講演後には現地のテレビからインタビューを受けることになるなど、結構ハードでした。

さて、一仕事終えてホッとした翌日、サンクトペテルブルグのパブロフ研究所を訪れました。研究打合せが主たる目的でしたが、もう一つ、大きな目的がありました。その目的とは、日本から贈られたパブロフの肖像画が現存するかどうかを確認することでした。というのも、法政大学の吉村浩一教授のご教示によれば、パブロフ研究所には、佐武安太郎教授が贈ったパブロフの肖像画が飾られているとのこと。佐武教授は東北帝国大学法文学部心理学講座の初代教授である千葉胤成のヴント文庫購入に一肌脱いでくださった人物です。しかも、パブロフから直接学んだ条件反射について開設間もない心理学講座で講義いただいた、心理学に縁の深い先生です。後には東北大学第8代総長となりました。

とはいえ、第2次世界大戦前の出来事です。お蔵入りしているのではないかと恐る恐る研究所内を見学していたら・・・ありました！よく目立つ場所に、堂々と飾ってありました。「昭和十乙亥年初夏於仙臺畫房 荒井文岳謹写」と添え書きがあります。仙台在住の荒井文岳という画家が1935年に書いたものだとなりました。

サンクトペテルブルグに、古典的条件づけの日本導入に関りの深い一枚の肖像画が残っていることをご報告申し上げます。



佐武安太郎が贈ったパブロフの肖像画

◆ 編集後記

ニューズレターの第1巻第1号、いかがだったでしょうか。

昨年、企画が立ち上がり、年の瀬が迫る頃から準備を進めてきたのですが、予定していた4月に間に合わず、5月になってしまったこと、お詫びいたします。また、力及ばず、論文自己紹介・書評・オピニオンのない、穴だらけのスタートとなりました。次回2号の原稿締切は9月1日（10月発行予定）です。皆さまの活発な投稿をお待ちしています。

新型コロナウイルスによって、私たちが慣れ親しんだ日常生活が一変してしまいました。今はその渦中ですが、いつか本誌で「昔話」として振り返る日が来ることを願っています。

2020年5月1日 広報担当理事 阿部 恒之



近著ご紹介、論文自己紹介、書評、オピニオン、イベント参加報告いずれも随時募集中です。（オピニオン1,600字、他は800字、ニューズレター編集委員会まで：newsletters@seirishinri.com）